
超次元ゲームネプテューヌ～絶望はこの身に希望は我が手の中に～

燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元ゲームネプテューヌ〜絶望はこの身に希望は我が手の中に〜

【Nコード】

N9114Y

【作者名】

燐

【あらすじ】

彼女達に希望を己は絶望を背負うと決意した少年は冥獄界で静かに眠っていたがある出来事をきっかけに再びゲームギョウ界に舞い降りた人間としてはなく女神の対極した存在である冥獄神『ブラッディハート』として混沌と破滅に進むゲームギョウ界を目の前に少年は何を思い行動するのかそして少年の前に最大にして最凶の敵が立ちふさがり史上最悪の封印がいまここに解かれる！

少年は仲間と協力し女神を救うことができるのか！？再び世界を守

ることができるのか！？『超次元ゲームネプテューヌ』黒閃の騎士
』の続編これはオリジナル多いよ！

プロローグ（前書き）

始めてしまった・・・まだ決めたところまで外伝進めていないのに
期末中なのに・・・とりあえず更新は遅めだと思いますがどうぞよ
ろしく願います！

プロローグ

ゲームギョウ界という一つの世界があった

別にめずらしくない至って普通の世界の筈だった世界を滅ぼす悪と戦いそして勝ちそしてまた悪が現れ女神と言う存在が悪を滅ぼすそして最後は一からやり直しいつでもそれで永遠に変わることのないそんな世界にある一人のイレギュラーにより全ての法則が壊された少年はただ守りたかったそして認めたくなかったゲームのようにはじめから、おわりまで全部が決められたこの世界が嫌だった

ゲームギョウ界にある四つの大陸

革新する紫の大地
『プラネテューヌ』

重厚なる黒の大地
『ラストイシヨン』

雄大なる緑の大地
『リンボックス』

夢見る白の大地

『ルウィー』

少年は渡り歩いたあるべき自分を探した・・・そして絶望した自分は
この世界の住民ではないイレギュラーだとだけどその中でも自分の
居場所を見つけることができた彼は頑張ったがむしろただ守
りたい一心に全てが無駄だということを知るまで知ってしまったと
き彼は再び絶望したしかし彼を支えてくれる仲間がいた。

だから頑張れたなんとも真実に打ちのめされてもそれでも突き進ん
だ自分がやっていることに正しいなんてないけど自分はそれがいや
だから

一緒に訓練をした彼女を

一緒にゲームをした彼女を

一緒に読書した彼女を

一緒に笑い合った彼女を

居なかったことになんてできない

そんなことは求めれないと自分は人間ではないナニカでもこの思い
はこの感情は人間だと信じているから

少年は力を欲したそれが禁断の力でも構わない彼女達を守れるなら
それでいいそして少年は『神』になった

絶対的な武装を手
に
揺るぎなき信念を心に

それは同時に世界を守護する彼女たちと対極になろうとも彼にもは
や迷いなんてなかった

そして少年は

定められた因果を
変わらない運命を
決められた物語を

そして世界すらも破壊した

超次元ゲームネプテューヌ
・・始まります
又、絶望はこの身に希望は我が手の中に、

プロローグ（後書き）

今日はこれ含めて三回更新する予定

絶望の始り（前書き）

今日寒い・・・っす

絶望の始り

そこは地獄というには優しくゴミ場というには無残な場所そのなかで漂う『悪』があつた

その『悪』には拳があつた無骨で人のような五本の指でけれど繋がっているのはモノはあまりにも異常な姿だった。

四つに分かれた黒いコートのようなものに人らしき顔を全身に浮き出ている身体その存在に顔はなく代わりに胴体に血走った一つの眼が迫りくる四つの閃光を捕らえていた

―――ゼブル・アンドロメダ魔皇の神域

それは何かに繋がっていたその根元には全身を漆黒色の飾りげのないコートで覆っており男なのか女なのかそんなことも一体何を見ているのかもさえ分からない

「はああああ!!」

「てえええい!!」

紫と黒の閃光が迫りくるその誰かは眼中になさそうにただ立つ尽くすが彼を根元に生まれた『悪』はその剛腕を振るい振り下ろされようとした刃を弾く

「そこです!!」

両手を塞がれガラ空きとなった背後に緑の閃光はその手に大型ランスを手には大気を貫きながら疾走するが四つに分かれた布切れは意思を持つようにランスは包みこみそのまま地面に所有者ごと叩き込んだ

「叩き・・・潰す!!」

更に上空に戦斧を持った白が流星の如く降ってくるが一つだけの眼が白を写した瞬間、極光が放たれ反撃も許さず白は地面へと落ちた

「ブラン！」

紫が仲間であろう白に声を掛けた瞬間抑えていた拳が太刀を弾きそのまま裏拳を叩き込まれ壁に埋まり沈黙する

「・・・っつ！」

もう一人拳を抑えていた黒が舌を打つ誰かはそこで誰かはこの戦闘で初めて見て黒をそして・・・

「・・・潰れる」

そう呟いた

「ぐっ・・・」

自分の武器ごと地面に叩きこまれた緑が置き上がる目の前の光景に

目を疑った白は全身を焼かれたように赤色になり黒は壁に叩きこまれ沈黙化しており紫は地面を一体とされ動く気配を全くさせない・
・自分を覗き全滅・・・その言葉が頭を過った

ぱちぱちぱち

紅い大地で突如手をたたき合う音が響くその音に誰かはその方向へ向くそこにはまるで天使のような翼を広げその逆な邪悪な悪魔のような笑みを造りその手には死神を思わせる大鎌が握られていた

「見事だ」

ただ一言呟くその反応に誰かは喜びも悲しみも感じない顔も全てが見えないほどにフードを深く被っているからだ

「こいつらは・・・捕縛するでいいんだよな」

誰かは彼女に問う。彼女は満足げに頷き誰かは緑とは違う紫を叩きつけた壁に向かって歩き出した

「――！」

まずいと緑は痛む身体を無理やり動かそうとするあそこにはあの子がいる！

「ふっ・・・」

後ろから零れる女性の声振り向きことさえ許されず緑は意識を殺さ

れ地面へと墮ちる

「に・・・げ・・・て・・・」

紫が必死に声を上げる自分以外の誰かに訴えるように誰かは紫の前に立ち自分の背後に浮かぶ『悪』に指令を送る

「・・・ね・・・ぷ」

無情にも言い切る前に『悪』の拳撃は紫に叩きこまれた強大な力の前に壁に亀裂が入り紫ごと空中へ放り投げられる

「お姉ちゃんー！！！！」

紅い大地の中で一際目立つ桃色が砕けた壁の中から姿を現す紫は空中を数回回り地面へと墮ちるもつすでにその目に光は灯ってはい

「ひつ……………！！」

前を向けばそこには『恐怖』があつた女神達四人を相手に圧倒しその背後には自分の姉に止めをさした『悪』

「おねがい……………もう、やめて……………このままじゃ……………！！」

祈るように手を合わす彼女を見ながら誰かは興味無さそうに背後の『悪』に指令を送る

「ゲームギョウ界が……！」

ゆつくりと拳を彼女に狙いを定める抗う力を持たない彼女はただ訴えることしか出来ない

「壊れちゃうよ——！！！」

拳は降り下ろされ辺りに静寂が訪れた

20XX年

ゲームギョウ界は再びマジコンネの脅威に曝されていた

設立された犯罪組織『マジエコンヌ』と呼ばれる謎の組織の出現。

違法ディスク『マジコン』と呼ばれる奇妙なアイテムを大陸全土にばらまきそれによりシヨップは枯れ

クリエイターは飢え、あらゆるギョウカイ人が全滅したかに思えた。

無法世界とは縁遠いゲームギョウ界も、マジエコンヌの登場以来、人々のモラルは低下の一途をたどるばかりで、もはや大陸人口の大半はマジエコを崇めつつある

取り締まるべき政府も何故かスルーしまくりで、とにかくゲームギョウ界は滅茶苦茶に、そこらの民度の低い無法世界になりつつあった。

そんなゲームギョウ界の対になるモンスター誕生の裏世界『冥獄界』では……

絶望の始り（後書き）

四女神を相手に超余裕のチート、マジック・ザ・ハードが優しい？
とうか柔らかいです原作とはちょい違いますから生まれが

目覚める冥獄神『ブラッディハート』（前書き）

ちゅーん・ぶいんちゅーん

[illegible]

一緒に遊ぼうよ

あそぼうよ

アソボウヨ

ただ永遠と押し付けられる怨嗟の輪転ははや四年、人の数だけ光があり闇がある

「四年……四年もたったのか」

自分にとってはもっと長い時間を感じられた一日一日が地獄で肉体についていけない精神の性でなんと壊れかけたか（……）数えるだけでバカバカしい。それでもあいつ等が笑っていられると思えば……その信念だけが自分を『零崎 紅夜』を支えてくれる唯一の柱

「あいつら、元気にしているかな」

四年も会ってないこんな世界にいたただ負の念のみしか感じなくゲームギョウ界で起きていることが分からない

ただ……三年前からゲームギョウ界から送られる負の念が多くなっていることが気掛かりだ。あいつらとくにネプテューヌ又は仕事してるだろうか

ふと、この屋敷のテラスに出て外の風景を眺める血の色をした夜、闇色の大地に蠢く紅の影、ここはゲームギョウ界が天国としたらここ（冥獄界）は地獄だな

「……………ん？」

暫くこんな汚く穢れた風景を眺めていると大地に蠢いていたモンスター^の姿が消えた

「違法ディスクまだ残っていたのか……？」

ネプテューヌ達の前に女神をしていたマジコンネがばら蒔いたという違法ディスクそれは元々アイツ^が作ったものでゲームギョウ界と冥獄界の境界に干渉し冥獄界のモンスターをゲームギョウ界に転送させる為のアイテムだもう全て破棄させたと思ったのだが・・・

「……俺がいなくても大丈夫だろ女神がなんとかしてくれる」

そんな考えの中、再び玉座に戻り座る今は冥獄神^{ブラッディハート}として人々の絶望を受け入れないといけない。その行為に慣れないといけない

慣れない限りは俺はゲームギョウ界に行けない迷惑がかかる

相変わらず耳元に訴えられる人々の怨嗟にため息がでるこの世界に来て少しアイツはこの世界を去ったアイツこの両方の世界の住民ではないしあっちもあっちでかなり多忙なそうで四年ぐらい出張と元気良く去っていった

「……………」

後ろに体重を掛け赫灼に輝く自分の得物を眺める。これが今の自分が送っている日常

.....

「ん・・・？」

昼寝でもしようと思ったがまた負の念が響いた・・・これは嘆きだ
悲しき助ける求める声、今までも聞いてきたその嘆きに何故か俺は
その声に耳を澄ます

.....

とても、とても懐かしい声だった

「…………ごめん言いつけ破る」

尋常な無いことは分かっただから俺はアイツに貰った不思議な形を
し紅い宝石が埋め込まれたイヤリングを握り呟く

空いている手を上空に突き上げると同時に馴染んだ重さを感じそれを
回転させ持ち手を交代し左肩に置く

腰に巻き付けているホルダーに二つの緋色の拳銃があるのを確認し

前方に手を向ける

その先には闇が発生してそれはブラックホールのように渦巻き始める

「……………」

ふと横に飾られていた悪趣味なデザインの鏡が目に入るそこに写っているのは自分の変わり果てた姿

右顔と銀から黒に変わってしまった髪を残し肌を全て隠すように包帯で巻かれている自分の姿

人々の怨嗟とモンスターの獣吼によりまともに寝れるわけなく目の周囲は黒ずみ死者のような蒼き瞳が冷たく光る

「あいつらは……変わらないでほしいな」

そう願いなにか異常が起きたであろうゲームギョウ界に旅立つ

だが俺はそのとき知らなかった守ると決めたネプテューヌ達は囚われの身にゲームギョウ界はマジコンネの手により無法と化した世界になっているなんて

そんな絶望を希望に変えるための物語が今ここ始まった

目覚める冥獄神『ブラッディハート』（後書き）

アイツはまだ出て来ないです忙しいですから

次回は・・・プラネテューヌかな？ラスティションでも回しやすいですが・・・迷い中

知った現実（前書き）

テスト勉強しないと・・・

知った現実

目を開ける豊かな野原に所々が白い蒼き空、思わずきつくフードを被るいままで人工的な光ではなく自然の光を見るのは四年ぶり今の俺にはそれは明るすぎて眩しいものだった

「・・・っ」

全身に重りが乗せられたような感覚が発生するゲームギョウ界の負は冥獄界である程度処理されてくるが俺がゲームギョウ界にいる間はダイレクトに通じ子供の声、大人の声、老人の声、人それぞれの心の中にある欲望や憎しみの声が頭に響き、思わず地面に膝を付けてしまう

「・・・黙れ・・・!」

振り払うように地面に拳を叩き込む人外となつた俺の力はすさまじく俺を中心にクレーターが形成される

「行かないと・・・!」

自分の記憶が正しければここはバーチャフォレストということは俺がいる大陸はプラネテューヌの筈だネプテューヌとネプギアが居るはず・・・!

「ヌラ〜〜」

要約動かせるようになった身体を起こしかすかに残る記憶を頼りに

街に行こうとすると草むらからゼリー状のモンスター、スライヌが飛んできた

ぴょんぴょんと撥ねるスライヌに少し愛くるしさを感じながら俺は脚を進ませる・・・モンスターは俺を攻撃することが少ない。それは冥獄界を管理している俺だけの特典で元々モンスターは人の負を具現化したもので俺はその負を管理するものだモンスターからすれば俺は同族に見えるらしく縄張り荒らされたかと思われ攻撃されるからただの共食いかそれ以外でモンスターに攻撃されることはほばないそしてある程度のモンスターなら会話もできる

「街はどっちにあるんだ？」

「ヌラゝヌラヌラゝゝ」(南に行った方にあるよゝ)

よく見るとこのスライヌ怪我をしている切り傷と何かに刺さられたような怪我だ

「そうか、ありがとう。その怪我はどうした？」

「ヌラ!!ヌラヌラヌラゝゝ!!!」(いきなり襲ってきた三人組にやられたんだ!仲間と合体したけど全く歯が立たなかったんだ!)スライヌは数少ない合体できるモンスターで一匹だと弱いが集まればそれなりに強くなるそれを倒したということはそれなりの実力者ということだ

「それは運が悪かったな」

「ヌラ、ヌラヌラ・・・」(全くだよ女神が不在の時チャンスと思

「ただただ……」

「……さて、女神が不在？どういうことだ」

とても聞き逃しのできないキーワードに思わずスライヌを驚掴みにする

「ヌラ〜〜！！！！」（痛いよ〜〜！！！！もつと優しく！！！！）

「言え」

そんなことはどうでもいいくらいサボリ魔のネプテューヌでもそれは異常だアイツだって自分の大陸の人の事、大切に思っている筈だ！

「ヌラ〜〜」（不幸だ〜〜）（泣）

聞くところによると三年前から突如自分を倒しに来る女神が来なくなったとのこと風の噂ではプラネテューヌも含めた四女神が行方を晦ましたこと

「ヌラ！」（あいた！うう……）

あまりのことに思わず手を離してしまう三年前……いつもより冥獄界に負が多く流れ始めた時期だ……！

「ヌラ・ヌラヌラ〜〜！！！！」（一体僕がなにをしたん……う！？力が溢れ……！！）

「・・・つち」

とつさにその場から離れる地面には先ほどのスライヌが俺のいたところに突進をし地面にめり込んでいた

「■■■■■■■■■■！！！」

もはや先ほどのスライヌとは違い理性をなくしている・・・俺の、性だ。俺はゲームギョウ界の負を司るハードだそしてそれは同時に負で具現化しているモンスターに力を無自覚に与えてしまう俺はハードとしてまだ未完成近くにいるモンスターに無造作に力を与え本来のモンスターへと覚醒させてしまう！

スライヌの突進を避けながら再び思考を動かす。冥獄界にいるモンスターは元々理性のない獣だがゲームギョウ界に送られると同時に自我が生まれるそれはゲームギョウ界に光があるからだ信仰の力によってモンスターという闇は一部浄化され弱体化し感情を生み出す

だが・・・俺はまだ未完成であるがゆえに近くいるモンスターに負を勝手に入れ込んでしまうそのことにより冥獄界にいる本来の姿に変えてしまう・・・俺は俺自身をコントロールできていない！

「■■■■■■■■■■！！！」

「・・・ごめんな」

先ほどまで明るく話してくれたスライヌの姿はなく禍々しいオーラを放ち見る者全てが敵だと言わん限りに襲ってくる俺は背中の大剣『紅曜日』を抜き突っ込んで来たスライヌを一刀両断した

「・・・街には行けないな」

負は新たな負を呼ぶ俺が街にでも行けばモンスターは街に襲撃してしまう可能性があり俺の近くにいるモンスターは凶暴化してしまう・
・誰かに迷惑がかかる

「・・・」

自然の日光と自由に生える草花その全てを俺は穢すことができるいや・・・現在進行で穢している（・・・・）

「畜生・・・」

これはまるで自分がゲームギョウ界の敵じゃないかと自分に嫌悪感を抱く・・・けど、俺はあの悲しき悲鳴を真偽を確かめるまで冥獄界に戻るわけにはいかないあの時の声は・・・

――ゲームギョウ界が

――壊れちゃっよ――!!――!!

確かにネプギアだった

知った現実（後書き）

ゲームで紅夜を言えば特殊能力でモンスターに見つからないだが戦闘時相手がモンスターなら無条件で汚染モンスターになるっと言った感じです（分かりにくかったらスイマセン）

そこにいるだけで災害を呼んでしまう紅夜が進む道は・・・どうぞお楽しみに

それは血の凍るような（前書き）

こっちも更新します・・・短いけど

それは血の凍るような

どれだけ足を進めたのか分からない
どれだけ屍を踏んだのかは分からない
どれだけ返り血を浴びたか分からない

言えることといえば俺は牙を向けて来るモンスターを無差別に殺戮していることぐらいだ

月夜の光はモンスターの体液を浴び淀んだ刃は元の紅さを取り戻し
さらなる旋風を生み出す

「はぁ・・・」

負に還されていくモンスターを見ながら一息、あれから出来るだけ
モンスターから情報を得ようとするがすぐに負に汚染され暴走し襲
いかかってくるそれに反撃し殺す。

今日はそれしかしてないような気がするがそれなりの情報も手に入
らない。分かったことと言えば復活しそうな犯罪神マジコンヌを阻
止すべく四女神はギョウカイ墓場に向かいそして……今があるとい
うこと

残された希望とえば

プラネテューヌの女神候補生ネプギア

ラストেশヨンの女神候補生ユニ

ルウィーの女神候補生ロム、ラムである

女神を救うために彼女達は動き出していると思いたい協力もしたい

けどまだ冥獄神として不完全な俺が近くいれば無条件でモンスターが襲いかかってしまう……自分には自分を守るだけの力は確かにあるが厳しい戦いが予想されるそのとき俺は全てを守ることが出来るのか……その答えは出ない

だからできるだけ遠くで守ろうと俺は心に決めた

「ぐふっ……！」

精神と肉体は繋がっている精神が傷ついていけばおのずと肉体にも影響する。口から鉄の味が沸き出てくる

——今この時でも俺の身体は負に犯され続けている。俺にはそれを全て受け止められるような器は出来ていない。俺は何をしようにもずっとこれが呪いのように俺の身体を浸食し続け動きを遅くしていく

——つまるところ言えば俺は足手まといとなんら変わらない

「……おれ、何しているんだろっ」

近くの木に体重を掛け自分の前に広がる景色は魑魅魍魎の死骸のみだけが映った。この周囲のモンスターはほぼ片付けた火照った身体を夜の肌寒さで静めていく

ただ不自然を感じるほどの静けさだけがその場を守護していく

「……！」

一瞬、その場から離れ背中に背負っている紅い刃が特徴的な大剣『紅曜日』を抜刀し闇色の槍を切り落としていく

「――あなたが如何物ですか」

全身の血流が止まったような気がしたそれほど自分の目の前の女性は綺麗で美しくなによりも禍々しいモノだった

「……誰だ！」

いきなり攻撃をしてきた彼女に紅曜日の剣先を向ける。宙を舞うように浮かぶ彼女の表情はまるで偽物を見るような貌だった

「如何物に答える名前はありません」

その言葉と同時に胸がやけどしたのかと思うほど熱くなったゆつくり視線を下ろすとそこには誰かの手が生えていた

「ああ……肉体はそのままですね、恋しい愛おしい私の私だけのご主人さま」

金縛りでも受けたように身体が機能を停止させるそれと同時に自分が気配すら気付かず後ろを取られたのだと理解する

「……でも中身は如何物、なんと悲しい、なんと汚い」

ゴミを捨てるように投げられる抜けた胸から血が噴水のように飛び

散り円環の軌跡を描きながら木に身体を叩きつける

「だから……」

手を水平に向ける彼女、それが号令であるかのように空を受けつくすほどの闇色の剣が形成される

「……死んでください」

迫りくる数えるのもばかしいほどの剣の嵐を前に零崎 紅夜は
ゆっくり口から流れる血を吐きだしながら告げた

それは血の凍るような（後書き）

次回はいきなりガチバトル！・・・紅夜はゲームギョウ界を守ることにできるのか！？

月夜に刻まれる鮮血の十字架（前書き）

どうも、燐です。やっとモンハンやっとG級来ました……フッしんどかったZE

けど最初の依頼がナバルデウス亜種とか……おかしくない？僕はおかしいと思う

見たときまずいきなりラスボス級キタ

（。。。）

！！！！！！と叫んでしまった。・・・滅茶苦茶苦労したな……

月夜に刻まれる鮮血の十字架

――それは私が夜風に当たっている時でした

母さんはいつものように出張で遙か遠い異世界に行きました。けどそれは仕方がないことでも私の隣にはいつも兄さんが居ました……そう三年前までは

定期的に私達は連絡を取り合っていましたでしたが突如起こった地殻変動により私達が住むプラネテューヌとラステイション、ルウィーの大陸はお互いをぶつかり一つの大地になってしまったのです。

勿論その出来事により民衆は大混乱に陥りましたが女神たちの尽力により無事に収まりました……しかしゲームギョウ界の中心に現れたのですギョウカイ墓場が……それは母さんが厳重注意と言っていた絶望神『デイスペア・ザ・ハード』が封印されている魔の地それと同時に私の兄さんである超越竜『ゼクスプロセッサ・ドラゴニス』の守護の大陸でもあってギョウカイ墓場が姿が見せるということは兄さんの身に何か起こったということ

ギョウカイ墓場は言わば煉獄、死んだモノが一度その大陸にあつまる大陸そこから死んだモノは一ゲームギョウ界（天国）に再び転生し一冥獄界（地獄）に堕ち永遠の苦しみを味わうシステムになっている

なのでゲームギョウ界、冥獄界の間にあるギョウカイ墓場がどちら

かに姿を出すことは絶対にありえない。更に災厄が降り注ぎ私は全ての女神たちにギョウカイ墓場への調査を依頼しました……きつと私はそのとき焦っていたギョウカイ墓場の守護竜である兄さんの安否、世界の司書として母さんにこの世界を任された期待感……あのとき、少し冷静になっていれば女神達は全員帰ってこれたかもしれません

残された希望は女神候補生……と冥獄界のハードである零崎 紅夜
で女神候補生は女神たちの代わりにシエアを集めることができる
としてブラッディ・ハートは困った時に必ず手を貸してくれる頼も
しい人だ……しかしブラッディ・ハートは今でも姿を見せない。

しかたがないことだと思ってしまう。母さんは言った「完成しないと壊れていく」と冥獄神は世界の負を背負う器それが不完全であるならば今のゲームギョウ界に邪を撒き散らす存在に本来の意味で冥獄神はゲームギョウ界の敵となってしまう。完成するには最低でも五年は掛かると言っていたまだ紅夜さんが冥獄界に行つてまだ三年……このままではゲームギョウ界の未来はどうなってしまうだろうと未来に恐怖を抱いていたそのとき時でした

―――夜空を浸食するように広がる紅い翼を見たのは

闇色の刃が嵐となつて降り注ぐその剣先にいた彼はその手に持つ銃の形をしてながら刃が銃を飲み込む形状をした二つの双剣銃を振り下ろし全てを弾く

『ジェノ ■ イド・ ■ ー ゲン』

壊れた声音機のような不気味で不可解で不安定な声が呟かれるノイズの紅い翼は形状を変化させ鋭い鞭となり彼女に襲いかかる彼女は踊るようにそれらを華麗に避けていくが彼は口が緩んだ瞬間、彼女に赤い雨が降り注いだ

『……………』

彼、零崎 紅夜はその光景は見ていた突如襲いかかってきた謎の美女、人の形態だと勝てないと判断した紅夜は冥獄神ブラッディ・ハートとなり反撃に映った。込められた魔力が爆発し煙が空中を泳いで襲ってきた彼女を目視では確認できないしかし感じる彼女の気配を

「……所詮、如何物……弱いですわ」

月光のように精彩でしかし禍々しい狂気を感じさせる琥珀色の双眸は穢れたモノを見るような眼差しで紅夜を見下ろす。彼女が黒薔薇が描かれている機動力がある着物は傷一つなく紅夜の攻撃が無駄であつたことを証明するように靡く

『……………』

獲物を握る力が強くなる今自分の目の前にいる存在は自分が戦ってきたモノの中では迷いなくトップクラス、嫌なことに今の自分は万全ではない今現在でも身体が負に耐えきれず崩れて……いる不生不死であるおかげで再生するがまた崩壊していき体中業火で焼かれているような激痛が走りまわる

「それにしても……醜いまるで合成獣キメラのよう」

彼女の言葉に息をのみ込む冥獄神化した今の自分は違う存在へと変

わりその影響で巻きついている包帯はない隠されている所から映し出されるのは人の顔らしきモノだったり一部だったりそれは子供であつたり成人であつたり老人であつたり性別関係なしに紅夜の身体を浸食するように浮かんでは消え浮かんでは消えを繰り返している

彼女の言うとおり今の自分は一醜い（化物）に近いモノだつた

「……………分かりましたわ。ご主人様」

唐突に口を開く彼女まるでその場にいない誰かと話しているようで再度紅夜を見下ろす

「全ては我が恋しい愛しいご主人様の為に」

彼女の回りに闇が集結していき一本の巨大な槍らしき形状をしていく紅夜は冷や汗をかくこの肌を刺すほどまで感じる力、それは一プラネテューヌが吹き飛ぶほど（……………）の力の塊

双剣銃が鮮血を零すような火花を散らす紅夜はそれを交差する。紅夜の身体は負が騒ぎ立てるように蠢き始めそれと同時に身体の一部がまた崩れるまた再生される（……………）気が狂うほどの激痛を歯を立て堪え紅夜は彼女は動いた

「デイストラクシオン・ペイン 終末を呼ぶ天魔の槍」

『ブ■ッデ■・■ロス！！！』

鮮血の十字架と滅亡の痛みはぶつかりゲームギョウ界を震わすほどの衝撃波を巻き起こした

月夜に刻まれる鮮血の十字架（後書き）

えつと勝敗はまあ……引き分け？です。

ココだけの話、彼女は1%ぐらいしか実力だしていません

空並の超チートですあとヤンデレですヤンデレです大事な事なので
二回言いました。次回は多分原作キャラ……でると思う

何もできない(前書き)

本日二回更新!明日も頑張ろう!

何もできない

夢を見たとてもとても懐かしくて楽しかった思い出

みんなで笑って

みんなで遊んで

みんなで困難を乗り越えた

そして彼は再会の約束をして私達の前から姿を消した。一生の別れではない早ければ5年後に再開できるその言葉を信じ今まで自分達が今噛みしめている平和を今自分が見ている光景を彼に見てほしかった……けど復活したマジュコンヌのおかげで彼が必死で本当の意味で平和にした世界は滅茶苦茶になってしまった

自分の親友である二人は仲間と一緒にギョウカイ墓場に行ってしまった……そして三年間音沙汰なしその間にマジュコンヌの信教は広がり女神達の信仰は減る一方で私はギョウカイ墓場に向かった……
看護師になった親友が付いてきちゃったけど必死で搜索して親友である女神二人と他の女神たちも見つかったいざという時になけなしのシエアを結晶したシエアクリスタルで回復させようと尽力したけれど謎の敵により私達は一人だけしか助けることが出来なかった

「……………あいちゃん？」

よほど深刻な貌になっていたかの心配するように顔を覗かせる親友に今できる精一杯の笑顔で大丈夫と返す。親友は渋々と引いてくれた彼はこれないと考えいい……けど心の中では来てほしい助けてほしいいつも困った時は近くにいてくれた彼と会いたい

そう思っている間に一つの部屋の間に立つ朝突如、プラネテューヌの教祖であるイストワール様から呼び出しが掛かったのだ用件は詳しくは知らないが女神候補生であるネプギアも一緒にでないことに違和感を覚えつつ部屋の數位回やさしく叩く

「……どうぞ」

幼さが残る声を聞きドアノブに手を回し開けるそこには本の上に乗った妖精のような容姿であるイストワール様がいた

「おはようございます。アイエフさん、コンパさん」

私達もそれに習い朝の挨拶を返すイストワール様の顔は真剣そのものでありこれから話されることが一体それだけ重要なことかと語っていた

「イストワール様、用件は为什么呢でしょうか」

「昨夜、紅い翼を見ました」

突如言われたイストワール様の言葉を理解するのに数秒時間が必要とした紅い翼それから導き出される答えは……

「まだ調査中ですが昨日の何らかの戦闘があつたと思われる場所から紅い翼が見えました彼である可能性かモンスターである可能性は二分八分ですが一応貴方がたに報告します」

今でも覚えている紅い翼を広げ蒼穹を駆ける彼の姿は目に心に焼き付いている……会いたい！

「それは……こうさんですか？」

「調査中です」

震える声でコンパが問うがイストワール様はそれを切り捨てるように言う

「けど覚えておいてくださいー彼が敵となるか味方となるか分かりません」

その時、私はイストワール様の言葉を理解できずにいた

「はあ、はあ……ぐっ！」

全身を突き刺される痛みが全身を襲うどうやってここまで来れたかは意識がない既に冥獄神化を解除している為、身体が崩壊していく事はないが使用の反動は確実に自分の身体を痛み付けている

ここは……迷路のように広がる円形をした立場に自然豊かな場所であるダンジョンであるバーチャフォレストだった。ボロボロの身体を鞭を打ち紅曜日を杖の代わりに要約立つことができた。あの謎の美女の放った一撃と自分が放った一撃はなんとか相殺したその周囲である山は消滅していしまったがあのまま何もなかったらプラネテューヌは間違いなく吹き飛んでいた

何度目になるか分からない吐血したところで地面に倒れてしまった。びくりとも動かない身体に何度も動け！と命令するがうんともすんとも言わない

「……ま、ずい」

今の自分は羽根をもぎ取られた鳥以下だ、ただ周囲に天災の種を撒き散らす自分は辺りのモンスターを無差別に凶暴化させてしまう幸いなことにここは最深部にあたる所だがここは街との距離はかなり近いもし自分が汚染させたモンスターが街に降りてしまったらと考えるだけでぞつとする

「は、やく。は、やく……！」

ここから離れないとみんなに迷惑がかかる自分は本来ここにはいてはいけない存在なんだだから動いてくれ！

「兄貴ここに誰か倒れているぜ」

誰かの声がした顔を少し上げ視線を上げると男女の二人組、一人は鼠色の肌を耳が尖って吊りあがった瞳が特徴的な女性と全身自分と同じ黒のコートを纏った男性

「！……そうだな」

自分を見た瞬間息を飲むような声を出す男性は紅夜を見下ろす

「動けねえようだし金モノでもいただいでいくか？」

やばい、自分も金モノになりそうなのは間違いなく紅曜日と緋壊螺だこれは友人に貰った大切なモノそれを奪われたそんなことになればアイツに合わす顔が無い

「……俺は反対だ。無駄にここは汚染モンスターが多い（・・）そんなくだらないことをしている暇があったらゲームキャラを壊してとつと帰りたい」

隠された顔でも分かるめんどくさそうな雰囲気を放つが紅夜に頭に引っ掛かる単語があつたゲームキャラ（・・・・・・）

「・・・・・・！」

思い出した確かゲームキャラは各国一つ一つに存在し秩序と循環を司る存在、時には女神たちを助け悪を滅ぼす力を秘めているという話だったアイツが作りだした保険のためとゲームギョウ界に作ったシステムだと聞いたことがある。それと同時にま、自分の前にいるのはそれを壊す存在……………即ち敵！

「うわあ、なんかもがき始めたぜどうする兄貴、楽しめたほうがいいんじゃない？」

「……………それだけ生きたいという気持ちが多いんだろうこういう何があつても生きようとするやつ、俺は好きだゲームキャラを壊したら街ぐらいには届けてやろう」

敵が目の前にいるのになんで動かないこいつがネプテューヌをノワールをベールをブランを傷つけた奴かもしれないのになんで動かない！くそ、くそおお！！

「それじゃ、行こう。リンダ（・・・・）」

「！……………兄貴ただ私を名前で呼んでくれるのは」

敵である二人の背中を俺はただ見続けることしか出来なかった

何もできない（後書き）

下っ端^{リンダ}は苦勞人で常識人というイメージがある

次回はいいよ原作主人公の登場！そしてバトルあるよ紅夜も動くよ

因みに黒コートの人は四女神がこつた人と同じです

絡む運命 前編（前書き）

更新速度が遅くなるばかりそして駄文……短い

絡む運命 前編

目を瞑ればまたあのときの光景がよみがえる

地にひれ伏されたブランさん

地面に叩き付けられたノワールさん

後ろからの攻撃に倒れるベールさん

そして異体の拳に宙を舞うお姉ちゃん

私はそのときただ隠れて見ていることしか出来なかった。

私はお姉ちゃんみたいに強くないから私はお兄ちゃんのように強くないから

そして私は何もできないまま捕まった、アイエフさんとコンパさんのおかげで私は助かったけど思ってしまうもしあの時、助かったのは私じゃなくてお姉ちゃんだったりしたらもっといい状況になっていたかもしれない……って

ポカッ

「あいたっ！」

突如横から振り下ろされた鉄拳は私の頭に直撃した。俯いていた顔を上げるとそこにはむっとしたアイエフさんの貌だった

「あんた、まさか自分が助からない方が良かった……なんて思っ

ないでしょうね？」

……思考を撃ち抜かれた気分でした

「はあ、あなたネプ子のように少しはポジティブになりなさい。なんとかなるわよ」

アイエフさんにしては珍しい根拠のない言葉でした。なんとなく……じゃ無理だと思うあの黒いコート、おねえちゃんが女神達が一斉に立ち向かって倒せなかったあの……幽霊のような人には

ドゴーーーーン！！！

突如、爆発音と共に地震が起きたかと思うほどの揺れが私達を襲いました

「きゃあああ！なにか隠れるところはどこですか！？」

近くの物に捕まり振動が収まるのを待ちます。多分その震源はこの先だということが感じられ私達は目を合わせお互いに寒気を感じました

「先を越された！」

アイエフさんの言葉に私達は一斉に走り出します。いーすんさんの情報によればこの先にゲームキャラが居るはずですが犯罪組織マジユコンヌがゲームキャラの存在をどこかで知り壊しに来たのだと私

達はその時、確信しました

そして開けた場所に出てその先には原型をとどめていない粉々に破壊されたモノと

――――お姉ちゃん、女神たちを圧倒した黒いコートの人がいました

「なんだデメエらは？」

兄貴の一撃でぶっ壊したされたゲームキャラを見て優越感に浸っている三人組の誰かが走ってきた

「あれは……」

兄貴はその三人組を見てなにか身に覚えのある奴を見たような声を

零した

「兄貴、まさかあの中に好みの奴がいるのか!？」

「なぜ、そんな考えになるんだリンダ？」

一息を付かせないツツコミは更に私の不安感を沸きださせる

「やつ、やっぱり兄貴は胸が大きい奴が好きだったんだ……!」

とくにあの注射器持っている奴!服の上からでも分かるだなんて……
…う、羨ましい!

「おゝい、リンダさん?人の話を聞いてくれますか??？」

私はそれなりに露出度が高い服着ているのに兄貴は全く私を見てくれねえ!

「マジック・ザ・ハード様と仲がいいのもそのせいなんだ!……!」

本当は今日私だけでゲームキャラを壊す予定だったのに買い物中の兄貴と鉢合わせして兄貴曰くマジック・ザ・ハードにアップルパイ作ってくれと頼まれたとか……くっ!

「おれはジャツジを除いてみんなと仲がいいと思うんだけど……!」

「嘘だあ!……!」

私の声と共に気味悪く羽ばたく鳥たち……なんか古い感じがした

「人の話を聞け」

呆れた兄貴から繰り出される鬼のような鉄拳は頭に直撃、それなりに手加減しているのは分かったが兄貴の武器は手甲だから滅茶苦茶、痛てえ

「あの桃色の髪の奴、プラネテューヌの女神候補生だ」

「マジで!？」

「マジマジ」

兄貴の肯定の言葉はヒロイン全員武士娘のギャルゲーで聞いたことあるような気がした

「逃げないだろうなあと思っていただけ……まあいいか」

「いいのかよ!」

兄貴は少しマイペースっていうか動揺なんて全然しないよな。うん
うん

「ここでまた捕まえればいい話だしな……」

ある意味で助かったぜさすがに女神候補生を含めて三人相手も相手にするには私じゃ無理だったかもしれないねえから兄貴がいるなら百人力どころか一億人力じゃねえか四女神相手に無傷だったしな

「あ、……ああ……!」

ククク、あの女神候補生恐怖に震えてやがるそりゃ、そうだ兄貴勝てる存在なんていねえ女神が最強なら兄貴は最恐だな！

「ちょっと！ネプギアどうしたのよ」

「あの人……です。あの人……お姉ちゃんを女神たちを一人で倒した人です！」

信じられないようなモノを見るような目になった他の二人、兄貴から黒い妖気が溢れだしてきたいきなりそれか！四女神を倒した技……えっと名前は確か魔皇^{ゼフル・アンドロメダ}の神域だったな

「マジック待たせておくとあとが五月蠅いからな……とつとと、蹂躪してやるよ」

兄貴の言葉と共に

―――
虚空に瞳が開いた

絡む運命 前編（後書き）

今回の視点はネプギアとリンダでした

リンダ暴走、いまはギャグ中々入れられないですからこんな感じで入
れていきたいなあと思っています。ではでは

絡む運命 中編（前書き）

……色々考えていたら三つに分かれてしまったそんなに長くないの
に………すいません！

絡む運命 中編

紅い水溜まりに浸かりながら必死で体を立ち上がらせようとする。
耳に届くのは強大なモノが何を砕いていくような音で更に焦りを感じさせる。

何故なら見たのだ明るく綺麗な桃色の髪を見間違えることはないあれはネプギアだ

「グフツ、……がぁ、ああああ……！」

全身を焼かれるような痛みを歯を食い縛りながら要約立ち上がるたがその足取りは千鳥足でいま倒れてもおかしくない状況だったにも関わらず紅夜は一步一步、休みを知らない。

既に半分意識があるかないかの瀬戸際にも関わらず紅夜の歩みが止まらない。

どれだけ体が崩れどれだけ吐血を繰り返しても紅夜の足は動き続ける。

そこまでする必要はどこにある？

あるのだ紅夜にはあの日、アイツの前で言った過去の自分の全て捨て今の自分を肯定したときから紅夜の存在理由は誰かを守ることそれしかないのだ。

「ブラッディ・ハート
冥獄神化……！」

その言葉と同時に紅夜の体は弾け髪が、瞳が鮮血を浴びたような紅へと変化していき負が物質化するほど深く、禍々しく、おぞましいほどの真紅のプロセスユニットが装着されていく。

メガミハコロセ

「！」

頭の中で誰かが呟いたそれは自分とよく似た声で一斉に狂ったように、笑うように、紅夜の頭の中で合唱を開始する。

殺せ。犯せ。燃け。決れ。削れ。取れ。消せ。潰せ。炙れ。刺せ。
撃て。開け。汚せ。殴れ。噛め。斬れ。砕け。吸え。断て。抜け。
打て。縛れ。裂け。――行け。お前の赴くままに恐禍の存在よ。

自覚しろ。お前が何者であるかを。尖らせ。本能を解放しろ絶望（お前）はこんなにも美味しそう（幸せ）な世界があるだろう？

「――！！！」

赫灼に輝く銃でありながら剣でもある得物を逆手に持ち紅夜は躊躇なく自分の太股に突き刺した（・・・・・・）。

刃から痙攣して感じる嫌な感触を感じながら刃を左右に抉っていきそれはまるで罰を与えているように

『行■ないと あれ■は こ■しか ない ■ら イカナイト』

背中のプロセッサユニットに亀裂が走り開きVの字になりそこから真紅の双翼が展開され威嚇する獣の毛ように逆立ちそして紅い疾風が吹いた

――つまらない

黒いコートの男『レイス』は心の中で呟いた。発動された魔皇の神域は三人……いや、二人の攻撃を一切引きつかせないもう一人……確かネプギアと言ったか？よほど四女神をボコった時がトラウマになっっているだろうさつきから自分を抱きしめ震えている。

昔持っていた信念、信義、信条はそこらの犬が喰い散らしてしまっただかもしれないなぜなら自分も既に死んでいる身なのだ

なぜ自分が大地に立っているか今でも不思議で溜まらないがそういう運命を宿命を刻まれてしまった俺と言う模索体は

別に悔しいとか悲しいとか怨んでいるとかそんな感情はない変わらないからだ昔と造られた運命に進まされることは経験済みだ。

それに対して自分は最後まで気付くことはなかった大切なモノを失って初めて自分は踊らされていたんだと理解できた……遅すぎただから俺は逃げたんだ。全部捨てて

「ま、――――が付いてきたのは誤算だったかな……」

世間で言うあのヤンデレ娘は何の因果か自分の前に当たり前のように姿を現した未だに自分は主でいいのかと聞きたくなるがあいつには自分のところしか居場所がないからこのまえ少しお願いして奴の実力を測ってもらった……まあ、あの俺意外の存在は死ね死ね連発するヤンデレ娘からはまともな答えは帰ってこなかったがそれもいい

「せめて、俺はこの運命にもて遊ばれようか」

おれは用事が済めば消える存在――言わば道具のようなモノだけ
ど今は存在しているからだから早く来い。俺にとつてお前等しか相
手になりそうな奴はいない来い『零崎 紅夜』そして『夜天 空』

先ほどから疾風のような連撃する奴と注射器で射撃している奴を掃
い女神候補生に向けて拳を振り下ろす

さあ、早く来ないとお前らが大切にしているモノ（世界）が壊され
ていくぞ！

その時だった紅い閃光が俺を含め魔皇の神域ゼブル・アンドロメダが吹き飛ばされた

「あ、兄貴！」

さすがあの夜天 空をひかせた奴だあの四女神、相手では余裕だっ
たにも関わらずたった一撃でゼブルを吹き飛ばすなんてこの世界で
生み出されて（……………）初めてだ

「リンダ、逃げる。――お前を守りながら、戦えるほどこいつは
弱くない」

「まさか、アレが報告に合った……！」

冥獄界と言うモンスターが生み出される原初の地を守護する世界を
終わらす権利を所有する俺たちの組織マジュコンヌを似ていて違う
根元から世界を絶望に染め喰い尽くす。

史上最悪として最凶の存在にして

ゲームギョウ界の負の化身

全てのモンスターの王であり神である唯一無二の原型

その名はーーブラッディ・ハート

絡む運命 中編（後書き）

書いてて思ったあれ？このままじゃ支配エンド以上の終末に行きそうなのが……

まあ、いいやなんとかなるよ多分、今回正直ネタバレ連発な気がするこんなんで大丈夫か俺……

絡む運命 後編（前書き）

すいません前編と中編と後編に分けたにも関わらず戦闘行けなかった！やっぱり短いどうした俺……今回ネタバレしてしまった感あり

絡む運命 後編

――その力は女神の対極

魑魅魍魎の大地を見下ろしながら冥獄界の管理者は静かに口を開いた。

――女神が人に希望を与えるならモンスターは人に絶望を与える

目に悪いほどの紅い大地の上でもその美しさは穢れることを知らず神々しさを感じるほどの黄金の髪を揺らしながらそいつは真剣な顔で俺を見ていた。

――それは冥獄神も同じ
フラッディハート

いまでも思い出せば笑ってしまっほどの戯言、俺と言う存在に絶望を与えさらなる決意を固めたあの真実

――紅夜には二つの選択がある

一つは冥獄神として『神』として完成することそれは女神と完全に敵対存在になる選択。そしてもう一つは……

――モンスターとしての完成

冥獄神はモンスターの頂点、王であり神でもある俺の存在はモンスターと神の半分、いずれそのどちらかにならないと俺と言う矛盾なモノは崩れていくらしいだから最初はどちらも嫌だった。

完成した冥獄神は世界の敵、人々が絶望すればするほどそれが信仰となり強大な力を生み出しいずれは全てのモンスターをコントロールできるようになる冥獄界には億に近い数のモンスターが保管されているそれが一斉にゲイムギョウ界を襲えさせることができるのだ。多少の抵抗は予想されるだろうがそれは数の暴力、アイツは言った世界を終わらせる権利を得ると

そして第二の選択、モンスターになる。これは簡単だアイツもすぐにもしそうなったらどんな未来か予想できる。理性はなく、ただ無差別に、ただ無慈悲に殺戮を実行続ける獣に俺はなり間違いなく冥獄界のモンスターもゲイムギョウ界で生きているモノは全て死滅させるだろうと零崎 紅夜でもなくブラッディハートでもなく――
ブラッディハート・ベルセルグ
冥狂紅魔獣になると

『クッ………』

その真実を教えられた時は一杯笑った一杯泣いた。第一の選択はゲイムギョウ界の全ての負を背負うことそしてそれは本能的に女神を

敵と見做してしまう『呪い』が付いてしまう。

その本能を克服するのは不可能かもしれないとアイツは言ったもう二度と会えないかもしれないけど俺はその全てを背負う覚悟で冥獄神になっただんだ例えもう二度とあいつらに会えなくなっても俺は守りたいから

第二の選択は絶対に反対だどんなことになってもそれだけはその選択は間違っていると訴えることは出来る……だから俺は冥獄神の完成系

―――ブラッディハート・エクリプス終司神になる選択を選んだ。

「壊れた目だ」

全身漆黒のコートで隠された奴はなぜか悲しそうな声で俺を見つめてながら立ちあがるその背後におぞましい姿をした悪魔のような姿をした異体なモノが立ちふさがる。

『……………』

剣を振るう体力すら怪しいので何も喋らない否、喋れない。

「リンダは……よし、撤退しているな」

見られると色々とヤバいからなと声を零し声からして黒いコートの男はその手を開いた。

『……どういっつもりですか？』

紫色のなにかの欠片はカタカタと警戒するように口を開いた。

「そうだなこれは報酬だ、光は闇を呼ぶとか言うだろ？多少不安要素はあったけどよく来てくれた」

隠されたフードからはよくやったといわん限りの優しさが満ちていて本当にこいつは敵かと思ってしまう。

「とは言っても俺、信頼感ゼロだと思うから」

受け取れよと聞きとれた時、既に奴はゲームキャラを俺に向かって投げていた。

ノイズのような紅い翼を動かしその欠片を動かし手の中に収める。

『あなたが……ブラッディハート』

これがゲームギョウ界の秩序と循環を司る存在、形状からして恐らくディスク状のモノだろう推測するが無残に破壊されている。

「……紅夜…なの？」

信じられないような声が、懐かしい声が聞こえた下を見るとそこにはこちらを見つめるコンパとアイエフの姿があった。

多少のすり傷はあったが元気そうだなプテュー又達が捕られたとか

聞いていたからもしかしたら血眼になって探しまわって倒れていないかと心配していたんだけど良かった。

「こうさん…そのか、からだ……」

怖がらさせてしまったのかコンパが震えた声でこちらを見つめる。
ああ、今の俺は凄いいことになっているだろうなドロドロに身体が溶けているだろうな後先ぶっ倒れる覚悟で昔使った自己暗示で一時的に痛みを消した（……）……コンパ達の目に映る俺はとても惨い姿なんだろうな。

「お、お兄ちゃん……？」

苦しい嬉しい悲しい楽しいそれをぐちゃぐちゃに混ぜたような顔と表情でネプギアは俺を見てきた。

今だ！あの女神は無防備だ殺せ！その首を撥ねろ！その鮮血を浴びろその可憐な両手両脚を引き千切れ！おまえはなんの存在だ！？殺せ！おまえは女神を殺すことが出来る存在だもし殺せたならばお前はさらなる力を得る。さあ本能に抗うな楽になれこんなにも女神は綺麗だから汚したくなるだろう！？クハハハツハツハハアハさあ、さあさあ！臓器を抉りだし燃やせ炙れそして喰らえ！おまえの目の前にあるのは極上のデザートそれはそれは愛らしく可愛らしくこの世界の財産そのもの！奪え！殺せ！おまえにはその権利があるのだから！！！！

「――ネプギア……生きててありがとな」

ああ、良かった。ちゃんと発音できた頭の中が五月蠅いけど俺の本心は言えた。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん……！」

胸にロケットの如くの突っ込んで来たネプギアの頭を優しく撫でる三年たってもやっぱりこいつは甘えん坊だな。でもそれがとてもうれしいこれからネプギアは辛いことがいっぱいあるかもしれないけど大丈夫俺が命に代えても守ってやるから傍にいられないけど俺は……

『アイ■フ コ■パ 出■れ■ おま■達 とも 話し■かった。けど ネプ■アを 頼む！』

今にも泣きそうなアイエフとコンパにそつとゲームキャラの欠片を差し出す。

「紅夜……っ！行くわよコンパ！ネプギア……！」

「あいちゃん！？こうさんを置いていくつもりですか！？」

俺は不生死だ例えこの場で死のうとも生き変えられる。即ち捨て駒の役は俺にぴったりだ

「いや！アイエフさん！離してください！！私今なら女神化できますから……いや、いやああ！お兄ちゃん……！！！」

ネプギアの目には俺はまるでこれから死ぬ奴に見えるんだろうな……
……あながち間違っていないだろうけど

「終わったか？」

黒いコートの男は律義に待っていてくれた。これは感謝すべきだろうと俺は相手が敵だと分かっているにも関わらず小さく頭を下げた。

「これ知られたら俺、裏切りモノ扱いだな。ははは、まあ、ここで会うこの運命に俺は感謝する。おまえはまるで………のようだから」

黒いコートの男の周囲からまるで嵐のような殺意が溢れだす背後の幽霊のようなモノも声にならない悲鳴に似た咆哮が大地を揺らす。

「だから……きつちり殺させていただくぜ……！」

そして遂に始った。

宿命と言う呪いに抗う紅夜と運命ルールと言う鎖に縛られたレイス。似たもの同士の戦いが！

絡む運命 後編（後書き）

紅夜は女神と逆の存在そしてモンスターもようは人に害を与える存在なので冥獄神とモンスターは同じ存在なんですよね

だから本能的に紅夜は女神を殺したくてしかたがないんですよね外伝ではあの人をこっそり抑えて居ましたけどいまは不在のままじゃ日常的な会話が出来ないから予定より早くあの人出そうかな……自分でも思っけどこのドロドロ感をどうにかしたい

紅夜頑張っ！もう少ししたら応援来るかもしれないから！！

死闘！レース！！（前書き）

戦闘ムズイ……

死闘！レイス！！

最初に動いたのはレイスだった。背中に憑いている魔皇ゼブル・アンドロメダの神域を操作し大地を砕く剛腕がハンマーのように紅夜へと堕ちて来る

「—————！！」

赫灼の銃剣は紅夜の手中で舞いを起こし二刀を地面と水平にしたところで鮮血が飛び散るような火花を起こし光は二刀の刃からは紅い光刃が生み出される。ノイズの翼を巧みに動かし紅夜は振り下ろされた拳を斜めに躲し紅い光刃は唸りを上げ異形の両腕を切り裂いた

「ゼブル！！」

異形の名が叫ばれる拡散した腕が切り裂いた場所へと繋がり背後にある四つに分かれたコートが触手のように蠢き紅夜の足を捕縛し地面へと落とす。ゼブルは主人であるレイスの意思を受け上向けに開いた眼が煌く、その瞬間ゼブルの視線にあるモノは消しゴムで消されたような惨状へと変化する。

ゼブルの閃光に飲み込まれた紅夜はノイズの翼を自分に纏うように伸ばしほとんど無傷、この翼は負の放出機ありとあらゆる攻撃も放出される負を凌駕しなければその攻撃は拒絶される。ただ……

「その翼は便利だなしかし……お前はあと何分戦えるか？」

紅夜が背負う切れてない負が再び身体から浮き出し蠢きだし始める。人らしき目、鼻、耳、口がおぞましい旋律メロディを奏でる。

もってあと三分だろうなと紅夜は自分ではない誰かの意思に吞まれ

ながら考える正直こいつに勝てる自信なんて元からないネプギア達が逃げ切ればそれでいいのだ

崩れていく身体から紅黒い妖気が溢れだすそれと同時に紅夜が纏っているプロセツサユニットがドロドロに溶け始めた。

「……は、おまえもう……意識ないな」

その問いの答えはない既に紅夜の目には光は灯ってない、ただ底のない黒淵が見えるだけでドロドロに溶けるプロセツサユニットは更に禍々しく更に攻撃的に再構築していく

「自分が犠牲になればみんな助かる。間違っってはなない、けどそれは自己満足に近い」

紅夜を飲み込むようにカチカチと金属が小さくぶつかるような不協和音を立てながらまるで化物モンスターのように姿に変わっていく

「罪遺物であるお前はそれでもいいかもしれない。けど残された者のお前は苦しみを理解しているか？」

帰って来たのは底なしの獣のような唸り声、もはや身体の半分は人外の形へ『進化』を完了していた。

「……それが零崎 紅夜の贖罪名であるが故の呪い……か」

おもむろに空を見る既にゼブルは解除しているのでレイスの瞳に映るのはどこまでも広がる青白い空

「…………ごめんな」

それは誰に対しての謝罪か、ただ隠されたその顔は罪悪感に歪んでいることは確かなことだった。レイスは手を空に掲げるそれと同時にカタカタと大地が天空が世界が泣き始める。

「このままじゃ、決着が付く前にゲームギョウ界が壊れてしまうからな…………」

漆黒の瘴気が世界を喰らっていき天空は暗黒が飲み込み大地は鮮血の湖へと変わっていく

「お前はここに三回来たことがある。死霊レイス・カーニバルが舞う十六夜にな」

闇の色に変貌したした光無き瞳はただ完成するまでその時を待つ

「ここならどれだけ暴れても心配ない。だから…………俺も

…………全力で相手をできる」

ドンッと空気が潰されるような覇気がレイスから放出される全てを飲み込む正に闇のように

「さあ、……第二ラウンドだ」

『闇』はレイスを包み万象が恐怖を抱いてしまうような鎧らしき形をかたどる。それは全ての光を飲み込みながら異狂の存在であり独特の光沢感を生み出し恐怖と言う概念を突破したその姿は正に神々しい（・・・）モノだった

「この禁忌の天鷲絨を俺を超えて見せる零崎 紅夜！！！」
アルカナム・ビロード

この言葉が切っ掛けとなり遂に半分化物化した紅夜は動き出し始めたそれはまるでレイスを獲物として認識したようにレイスも動きだしお互いの速度は到底測りきれないモノだった。

獣のような鉤爪が迫りくるレイスはその振り下ろされる速さを超えて握った拳が紅夜の顔に直撃する。確かな手応えを感じるがレイスの背筋が凍るような感覚がしすぐさま紅夜の顔を飛び台に飛ぶその瞬間顔面ギリギリに刃物の尻尾が突き出た。もしあの場にいたら尻から串刺しになっていだろうと冷や汗を感じレイスはその尻尾を掴み持ち上げる紅夜はそれに従い空中に浮かび

「……おらあ！」

渾身の力を持って地面に叩きつけた。だが紅夜の顔は苦痛に歪むことなく逆にプロセッサユニットが顔の半分を飲み込みその顔から映る表情は歓喜と狂気に溢れていた。

『……、……、……、……』

聞きとれないほど濃い憎悪の声を放ちながら紅夜は強靱な鉤爪を煌かせレイスに迫りくるそれに型はなくまさに理性を失った獣そのもの

「残念、俺はお前みたいなタイプに有利だ!!!」

ただ突き刺してくる双爪を自分の身体を限界まで小さくして内側から掴む、掴んだその手を一気にこちら側に引き膝を無防備だった腹部に叩きこむ更に掴んでいた手を離し膝を入れた同じ場所に双拳を叩き込む。その衝撃に紅夜の口から血が吹き出るがレイスは怯んだその顎に拳を撃ち込んだ。

「……まだ、だ!」

浮かぶ紅夜の尻尾を掴みとどめと言わん限りに引き寄せ鉄拳を腹部に叩き込んだ。

『……、……、……』

更に連撃を叩き込もうとしているレイスに紅夜の身体は針鼠のように剣状のモノが突き出たがレイスの纏う禁忌の天鷲絨がその攻撃を
アルカナム・ヒロート
全てレイスに触れた瞬間消滅した。

「ゼロ距離最大……!」

狙いを定めレイスの拳が紫電が走るそれは小さき太陽のように輝く紫色の煌き

「紫天・皇月!!!」

大地を泣かせ天空を響かせ世界を恐怖させる一撃の後にはただ時が

静止したような時間だけが始った

「今度はもつと強くなってこい、じゃないと世界は救えない」

見下ろすのは隠された顔、厳しさと威厳が溢れる声が意識も呼吸もしていない紅夜に言われる

「もし全ての黒幕が犯罪神『マジユコンヌ』と知っているならばゲイムギョウ界に未来はないぞ」

レイスは紅夜を蝕む負を少しだけ取り除いた自分の力と紅夜の力は似ているからこそできる荒技だとはいえあの暴走に似た形態を解く為に零崎 紅夜という存在を一時的に殺した。不生不死でも極度の死の回復には時間がかかるのをレイスは知っている。聞いていないだろうが念のためにと紅夜にアドバイスをする。

「……じゃあな、また会おう」

その言葉を残しレイスは影となりその姿を消した。

場所は変わり薄暗い部屋で本に乗っている伶俐な表情の彼女は投影

されている場面に映る母親を見つめる

「それが冥獄神の二つの可能性……」

『そう、冥狂紅魔獣と終司神どちらもゲームギョウ界を未来を一変させる力がある』

思わずため息をつく詳しいことは知らないかったがまさかこんなことがあったなんて全く予想していった

「……紅夜さんがこちら側に来ています。……空さん、どうしますか？」

『空さんじゃなくて前みたいに母さんって呼んでよ……今の僕は男だけ』

場面に映るのはまるで造られたような全く無駄のない顔つきだったそれは場面越しでもその美しさは穢れることをしらず見る者全てを魅了させる自分の母親

「空さん、少しはこちらの状況を理解していますか？」

『はいはい、分かっていますよ。そうだなさつき嫌な予感がして実は来ているんだゲームギョウ界に』

その言葉に思わず彼女は息を飲んだとたん思いつきため息が出た。多分この人は自分の仕事を放り投げてきたのだろ……と

『半暴走状態の紅夜を発見したよ。今は冥獄界で休養中、当分は目を覚ませないと思うな』

いつもの口調だが長い付き合いである彼女には分かる。彼はものすごく怒っていると同時に心配していると

「そうですか……」

これからどうなるか半とはいえ暴走状態ベルゼルグを倒した相手、彼の情報によると力だけなら四天王どころかマジコンヌを瞬殺できるほど馬鹿馬鹿しいほどの力を持っているということだ……それを倒した相手となれば最大の脅威意外何者でもない。ただ疑問が残るそれほどの力を持ちながらなぜ来襲してこないのか

『可愛い娘の為に僕も協力するよ。ゼクスとは連絡とれないんですよ？』

その問いにすぐさま頷く。ギョウカイ墓場の守護竜である『ゼクス プロセッサ・ドラゴニス』とは一切連絡が繋がらないそれは……敵の手に堕ちたという可能性が極めて高い

「お願いして、いいですか？」

『そうじゃないよ』

救いを求める声は斬られ思わず彼女、イストワールは顔は固める

『助けてください。僕は君の親だよイストワール』

ああ、やっぱりこの人は変わらない。この人は基本的に傍観者だ、だけど本心から救いを求めれば優しくそして遅くまるで女神のよううに助けてくれる……本人の前では言わないけど自慢の母親だ

「――助けてください。母さん」

今、ゲームギョウ界は混沌に満ちている。犯罪神『マジコンヌ』が四天王が各国を穢している恐怖に震え、見えない絶望と滅びに震えることしか出来ないけど自分達には女神とおなじくらいの希望が存在する。

『あい、分かった。その全て破壊してみせるよ』

かつて敵でありながらもゲームギョウ界を一番に考え大好きなこの人ならきつとやってくれそうながしたその人はの名前は『夜天』

『空 冥獄界の管理^{ハート}者である破壊^{ゼロハート}神だ。

死闘！レイス！！（後書き）

主役一時交代？かな

空さん出るよ多分……次回はギャグと言う名の外伝やるよ！。因みにこれで第一章が終わるかな？第二章が長そうだな……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9114y/>

超次元ゲームネプテューヌ～絶望はこの身に希望は我が手の中に～

2012年1月10日22時51分発行